

## 森本さん、ありがとうございました

林 正彦 (天文学専攻 教授)

本学名誉教授、森本雅樹先生は平成22年(2010年)11月16日、心不全のため享年78歳で逝去されました。森本さん(先生と呼ばれるのが嫌いでした)は、昭和30年(1955年)本学理学部物理学科天文学課程を卒業され、昭和33年(1958年)本学東京天文台助手に採用、同助教授、教授と進まれ、昭和61年(1986年)に同野辺山宇宙電波観測所長に就任されました。昭和63年(1988年)国立天文台の発足に伴い、同野辺山宇宙電波観測所長、同電波天文学研究系主幹を務められ、また本学理学部教授を併任されました。森本さんは、その卓越した先見性と強力な行動力によって電波天文学をリードし、日本の

天文学と基礎科学の発展に大きく貢献されました。45m電波望遠鏡とミリ波干渉計を中心とする野辺山宇宙電波観測所を建設され、近年はミリ波VLBI観測の発展とスペースVLBI計画の実現に尽力されました。これらの功績により、昭和60年(1985年)に電子通信学会実用化業績賞を、昭和62年(1987年)には仁科記念賞を受賞されました。一度会っただけで、誰もが二度と忘れることができない強烈な印象を与える人でした。お酒が大好きで、「森本おじさん」の愛称で親しまれました。どんな年齢の女性からも人気がありました。学生のころ「森本さんて、すごいわね。」と言ったら、「お前、人をダメにする方法知ってるか。簡



■ 故・森本雅樹先生

単だよ、褒めればいいんだよ。」と言われました。私の理解を超えた人で、大きな薫陶を受けました。

## 玉尾孜先生のご逝去を悼む

星野 真弘 (地球惑星科学専攻 教授)

本学名誉教授、玉尾孜(たまお・つとむ)先生(地球惑星科学専攻)は病氣療養中のところ2010年12月10日にご逝去されました。享年79歳でした。先生は1992年まで本学の理学部教授として教育・研究に御尽力されてきました。先生の御専門は宇宙空間プラズマ物理学および磁気圏物理学で、電磁流体力学現象の理論的研究で数多くの業績を挙げられてきました。例えば、磁場勾配を伴う非一様なプラズマ中でのアルフベン波動と磁気音波の磁力線共鳴理論を提唱し、この理論は後に観測的にも検証され、地磁気の変化から地球磁気圏のプラズマ状態を探る研究に多大な影響を与えました。ま

た、地球上層大気のエネリ圏と、地球半径の数倍から数十倍の領域を占める磁気圏との間の電磁流体波動を介したエネルギー・物質輸送の研究を精力的にされるとともに、磁気圏でのプラズマ不安定の解明にも大きな寄与をされました。

玉尾先生は、学生と議論したりすることにとっても熱心で、黒板に向かって夜遅くまで議論する姿をよく見かけました。また講義においても同様で、私が受講させていただいた学部3年の磁気圏物理学の講義では、内容が盛りだくさんで半年では終わらなかったため、引き続き4年の毎週土曜日の午後に補講をしていたきました。昔の講義ノートを見ると当



■ 故・玉尾孜先生

時の様子が鮮明に思い出されます。

学者気質の先生のお姿を偲びつつ、ご冥福を心よりお祈りいたします。

## 寺山宏先生のご逝去を悼む

野中 勝 (生物科学専攻 教授)

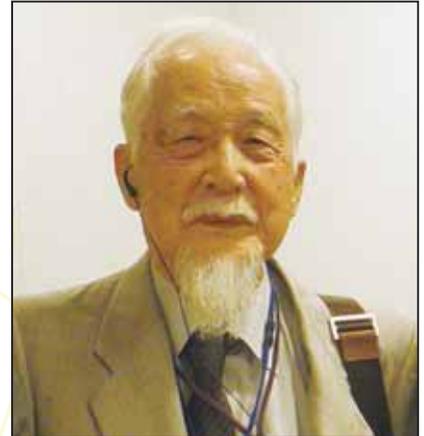
本学名誉教授寺山宏先生は2010年12月17日に、88歳でご逝去されました。同年9月には駒場で開催された日本動物学会第81回大会懇親会において、乾杯の音頭をとられ、門下生、後進とにこやかに談笑される元気なお姿を拝見したばかりでしたので、信じ難く、残念でなりません。

寺山先生は東京帝国大学理学部化学科をご卒業後、東京衛生試験所を経て、1951年本学理学部化学科助教授に着任されました。1958年には新設の生物化学科に移られ、1968年から1980年までは生物学科動物学教室教授として発牛生理学講座を主宰されました。

先生はコロイド滴定法を開発され、高

分子電解質の定量に先駆的な業績を挙げられました。また、細胞生物学の分野では肝細胞の増殖制御機構の解明に取り組み、いち早く細胞膜の重要性を明らかにされ、さらにウニの発生の生化学的解析など多分野に跨った研究をされました。

東京大学御退官後は、北里大学教授、工学院大学客員教授を歴任されましたが、ご専門以外にも多方面に才能を発揮され、特に漢詩は専門家にも高く評価されるものであったと伺っております。ご専門以外の御著書に、和漢の古典に登場する動植物を現在の分類体系に当てはめて解説された2冊の大著があり、2010年には日本の古代史研究の成果を「邪馬台国から日本国誕生の道程」として上梓されま



■ 故・寺山宏先生

した。

生涯現役として探究心を貫き通された寺山先生のご冥福を、謹んでお祈りいたします。

## 高橋武美先生のご逝去を悼む

橘 和夫 (化学専攻 教授)

本学名誉教授、高橋武美先生(理学部化学科、当時)はご闘病中のところ享年84歳にて2010年12月20日に逝去されました。高橋先生は戦後のどさくさに紛れて無試験で本学入学(ご本人からの情報)、1953年に理学部化学科にて学位取得後、同大学化学科有機化学講座の助手に着任、助教授を経て1962年に当時新設の天然物有機化学講座教授に就任されました。この間、明治時代のフグ毒やコンブの旨みに始まるわが国の本分野での先進性を確固たるすべく、特にそれまで薬学、農学分野が主流であった本分野の理学分野での基礎研究において大いなる貢献をなされました。1987年日本大

学を定年退官後は、日本大学にて引き続き教鞭を執られる傍ら、天然有機化合物の特に植物培養細胞による生産に関する研究を継続されておりました。

上記に加え、高橋先生の若き日に2度にわたるフランス留学を契機に、現在でも継続している日仏科学交流のきっかけをつくり、退職後も日仏理工学化学会の会長として大いなる貢献をされました。

筆者も高橋先生のわがままな門下生の一人ですが、好き勝手をさせていただいたうちに、いつの間にか多大な教育を受けていたことを今になって感じる次第です。ここにご冥福をお祈りします。



■ 故・高橋武美先生

## 小口高先生を偲ぶ

岩上 直幹 (地球惑星科学専攻 准教授)

小口高先生は1990年まで地球物理学科教授として、また退官後は名古屋大学太陽地球環境研究所の初代所長を務められるなど研究・教育に尽力してこられました。2010年12月27日に逝去されました(享年80歳)。先生はオーロラの研究で知られ、1956-61年の南極観測隊には1次・2次の夏・3次の越冬に参加、さらに12次では越冬隊長を務められ、南極電離圏のロケット観測を成功に導きました。またオーロラのTV撮像によってその形態から励起過程の本質に迫るという特色あるご研究をされました。1988-89年には地上多点観測網によるオーロラ観測をカナダなどで展開し、衛星では迫りきれない部分に地上多点で迫るという、これまたユニークな戦略でオーロラの解明に挑まれました。

観測器を作り、観測地に出かけ、自ら

の目で確かめ、大量のデータ処理に基づき理解・解釈を進めるという姿勢は終始一貫し、地上多点観測キャンペーンなども、実現性を疑う学会からの批判など物ともせず、杓にとらわれないスタイルで進められました。太陽地球環境研所長時には、欧州のEISCATレーダー観測への参入と国内の受け入れ組織の拡充にも努められました。戦中最後・戦後最初世代の新しいもの(車、自由、エレクトロニクス)を取り込む好奇心と行動力に加えて取りまとめの才により、教育、学会の発展に尽くされました。小口先生らしいエピソードとしては、35年前の厳冬、カナダ北部チャーチルの古い観測小屋で1950年代ものの凸面鏡を見つけ、持参の通常視野の高感度TVカメラと組み合わせ、全天TV画像のビデオを撮り、オタワ近くの研究会で公開し、世界初の脈



■ 故・小口高先生 (1984年夏, カナダ)

動性オーロラ全天動画像でカナダの研究者の目を見張らせた…などということもありました。

豪放かつ繊細だった先生のお姿を偲びつつ、ご冥福をお祈りいたします。

## 歌田實先生のご逝去を悼む

松本 良 (地球惑星科学専攻 教授)

歌田實先生は2011年1月25日深夜お亡くなりになりました。73歳というご年齢で急逝されたことに、先生を知る者はみなたいへん驚き哀しみ、喪失感に言葉を失いました。

先生は東京大学理学部地学科(地質学教室)をご卒業され、同修士課程を修了後、昭和39年(1964年)に東京大学教養学部(宇宙地球科学教室)の助手、昭和48年(1973年)より理学部および総合研究資料館の助教授、平成5年(1993年)に総合研究資料館の教授となりました。

先生の専門分野は堆積学・堆積岩岩石学であり、研究テーマは岩石の変質作用です。日本列島を構成する地層・岩石の際立った特徴は火成活動の影響であり、地層中には凝灰岩や火山岩が頻りに挟まれマグマの熱は広域的な温度場を乱します。先生は、凝灰岩を構成する非晶質火山ガラスが地層の埋没、温度の上昇に伴って沸石をはじめとするさまざまな鉱物に変

わることに着目され、沸石続成作用という概念を確立されました。特定の沸石鉱物・続成鉱物の出現からその地層の最高履歴温度を推定し、地層が埋没した深度や過去の地下増温率を復元しました。先生の業績は地層形成論や堆積盆解析論に大きなインパクトを与えただけでなく黒鉱に代表される金属鉱床の探査や開発にも大きく貢献しました。

講座談話会での学生の発表には、もっとも痛いところを短く的確に指摘されました。しかしコメントはあくまで肯定的であり、談話会後の飲み屋で励まされた人は少なくありません。先生は山を隈無く歩き、密にサンプリングし、たくさん試料を分析し、調査地域のマップをさまざまな色のマークや模様で詳細に分帯し、そこに美しい秩序を見出します。自然と向き合い徹底的に考えるという妥協を許さない真摯な姿勢を通して、研究とはこうやるものだとかえられました。

平成10年(1998年)の定年退官後



■ 故・歌田實先生

しばらくの間は総合研究資料館(博物館)で試料の分析とデータの整理を続けておられました。7~8年前に先生にとって沸石研究の古戦場とも言うべき伊豆の富戸に住まいを移されましたが、その後も最近まで地層の変質に関する学術論文を書かれておられました。

一貫して地層の変質作用の研究に生涯を捧げられた先生のご冥福を心よりお祈りいたします。